

三上義夫博士顕彰碑 1

我國の數學史は我國に

確乎たる自覺の力を賦與する

山田 孝雄 筆



場所 広島県安芸高田市立甲立小学校校庭

建立 三上義夫博士顕彰会 広島県数学教育会 昭和32年12月

昭和6年11月3日、大阪で行われた博士の講演「日本数学史上の特色と功績」で述べられた次の言葉から引かれたものとされている。

「我が国の数学史は、明らかに数学上の能力の乏しからざることを教え、我等に確乎たる自覺の力を賦與する。この事實は必ず数学教育上に有益なる効果を生ずべきものであり、充分にこれを利用すべきであろうことを力強く主張したい。」

日本学術協会報告第7巻第4号（昭和7年11月）

略 歴 （碑の右側）

明治八年二月十六日 甲立村に生る

明治三十八年 和算史の研究に着手

明治四十一年 帝国学士院和算史調査囑託 大正十二年 解囑

明治四十四年 東京帝国大学哲学選科入学 後同大学院に入学

昭和四年 国際科学史委員会委員に選ばれる

昭和八年 東京物理学校講師 後教授

昭和二十四年 東北大学より理学博士の学位を授けらる

昭和二十五年十二月三十一日 甲立町理窓院において没す

業 績 （碑の左側）

英文 和漢数学發達史、ドイツより出版
英文 日本数学史、デー、イー、スミスと共著、米国より出版
和算之方陣問題、
文化史上より見たる日本の数学、
関孝和の業績と京坂の算家並びに支那の算法との関係及び比較（学位論文）、
関孝和新研究、東西数学史、支那数学史（未刊）、日本数学史の新研究（未刊）

三上義夫博士顕彰碑 2 神測妙算 學貫天人

文学博士 佐伯好郎 題書

三上義夫博士は1875年2月16日、広島県高田郡甲立町に生まれ、1896年、仙台市第二高等学校（現東北大学）に入学されたが、眼疾のため数ヶ月で中途退学し、以後は独力を以て英・独の数学書を読破し後年の該博明哲な学識を培われた。1905年、博士は和算の研究に着手せられたが、和算興隆の基礎となった中国の数学に着目し、先ずその沿革の研究考究に没頭せられた。

次いで1908年、帝国学士院の委嘱を受けて和算史の調査に従いこの方面に関する基礎を定められ、1911年、東京帝国大学哲学科選科に入学し、更に大学院に進んで益々研鑽を重ねられた。

かくして博士は科学史の根柢に横たわる哲学的諸問題の究明に努められると同時に、和算資料の蒐集分析に一層の力を注がれた結果、1913年には「文化史上より見たる日本の数学」（創元社）を發表されたが、この書は文化史的方法論のもとに日本数学史の根本問題を論究されたものであって、我が国科学史の研究上全く画期的な意識を有する労作であった。



場所 広島市中区中町百米道路小町バス停前 建立 社団法人 全国珠算教育連盟

博士はやがてこの方法を中国の数学にも適用され、その成果は「支那と日本との数学の発達」(英文)(The Development of Mathematics in China and Japan: Chelsea)「支那数学の特色」「畴人伝論」、「支那数学史」等一連の論著となって世に送られ、国際科学史委員会々員に選ばれるに至った。かくて博士の学殖は愈々富み、その名声は日々に昂まり、1933年には招かれて東京物理学校講師となり、次いで教授に進み、多くの子弟に和漢の数学史を講じられた。

博士の学的精力は晩年に及んでも少しも衰えず、「圓理の発明に関する論証」(1930年)等、関流数学に関する綿密な研究を発表せられ、和漢の巧緻な観念的性格は博士の手によって完全に科学的に解明されることとなった。1949年には、学位請求論文、「関孝和の業績と京坂の算家並に支那の算法との関係及比較」を東北大学に提出して理学博士の学位を授与せられている。

博士の一生は篤学真摯、偏に真理の探究に終始し、名利の外に超然として妄りに世俗との妥協を許さず、高邁なる精神を堅持せられたので、戦時に際し諸般の困苦と闘われることも多かったが、不幸にも、戦乱のうちに夫人を失われ、加うるに敗戦後、農地制度の変革によって父祖伝来の田地を喪失せられ、1950年12月31日郷里において孤高無援の裡に寂しく生涯を閉じられた。享年75歳、法名を理学院教導義仙居士という。

思うに三上博士は東洋数学史の開拓者として我が国が世界に誇るべき科学史家であり、その一生の著作は質量ともに比類を絶し、燦として世界の科学史学界に輝いている。年来博士の学徳を欽慕する我々は、相謀ってここに、この記念碑を建立し、博士の偉大な功績を永遠に伝えるとともに、限りなくその高風を讃えるものである。

1958年10月26日

業績撰文 山崎 与右衛門 博士